
江戸小噺 集

南 多聞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

江戸小噺 集

【Nコード】

N5455R

【作者名】

南 多聞

【あらすじ】

小噺を江戸時代を背景に展開します

バチアタリ改訂版

よくぞおこし頂きました、今年は太陽の黒点活動が激しゅうございまして、こんな年は要注意なんでございますよ。戦争、内乱、天災と物騒な年になるんでございます。昨日も神社へ参拝にいきました、お御籤引きしました所、何と大吉が出てしまうのですよ。普通の方は大吉喜ぶんですがね、あたしは嫌いなんでございますよ・・・もう上がりようが無い。

大凶が大好きなんです・・・これ以上落ち様が無いってね。

さて、物事は見様によって変わるものなのですが

大工の八さんと長屋の大家さんとの話をしています。

「大家さんごめんなさいよ」

「おや八っあん、どうしたんだね」

「いえね、母^{かか}アと奈良の大仏さんへチョイトお参りへ行ってきやして、大家さんにお土産でサ」

「そうかい、八っあんにしては気が利いてるじゃないか」

「それがその後^{あと}夢見が悪くて、それで大家さんに相談でさ」

「お参りしたあと夢見が悪いとは、ご利益^{りやく}貰ったんじゃ無いのかい、どんな願いをしたんだね」

「願えする前に、大仏さんの手の格好に圧倒されちゃって」

「あの手の形は印相と言ってな、右手は施^{せむい}無畏で安心しなさい、左手は与^{よがんいん}願印で願いを叶えるということなんだよ」

「あっしが賽銭ケチったもんだから、昨晚大仏さんが右手でチョイト兄さんと中指曲げて『何かお忘れやしてやせんか』と手招きしやして、左手の親指と人差し指で丸を作るんでサ」

「ケチったって幾ばくかのお布施は出したんだらうね」

「大家さんそれが、一銭も出さずでして」

「そりゃいけないね、今更奈良までは無理ってもんだ。そうだ鎌倉

の大仏さんに行って奈良の大仏さんの分も、と賽銭あげてお出でよ」
翌日、八っあんは血相を変えて再び大家を訪れた

「大家さん 大変な事に成っちゃった」

「どうしたんだよ、今度はご利益頂いたかい」

「鎌倉の大仏さん、両手を受けて待ってたんでサ」

「それは良かった、もし大仏さんが手を上げてたら」

「手を上げてたら？」

大仏だけにブツぞう、どうぞう と成ったのでございます。

お後がよろしいようで

パチアタリ改訂版（後書き）

子供のクイズ 東大寺は誰が建てた？

ハーイ大工さん

奈良と鎌倉の大仏はどちらが先だった？
どちらも座っています。

お尋ね者（前書き）

懸賞金にハマった夫婦の結末は

お尋ね者

皆様よくお出でくださいました、このような場末のサイトにお出で下さる方は、運がいいんでございますよ。明日から家内安全、金運、子宝運、健康運、全部上向くのでございます。ご覧頂く方々の努力次第でございますけどね。

最近は凶悪な事件が多ございまして、其れでいて捜査が儘ならず、公開捜査に賞金が付く時代になったんでございませうね。賞金が付いたのも今に始まった事じゃございませうよ、江戸の時代からございましてね、

ここは長屋に一組の夫婦が住んでおります

「おいっ、おっ母あー 今帰ったぜ」

「おや、お前さん お帰り、早かったね」

「おっ母あー 喜べ 明日から大金持ちになれるぜ」

「お前さん そんなに良い仕事でも入ったのかい」

「奉行所の高札にお尋ね者が書かれたのを見たのよ、あいつに違いから、明日とっ捕まえて奉行所にしょっぱてやるぜ、賞金10両だよ」

「大丈夫かい、あんたに怪我でもされたら、いや命に関わる様な事にでもなったら、心配じゃないか」

「なーに 心配は無用よ、任しておけてんだ」

「それより、50両の仕事があるんだよ」

その時、表の木戸を叩く音がしますと、乱暴にも木戸は蹴破られ何人か踏み込んで来たんです。

「御用だ、伊蔵、神妙にお縄を頂戴しろ」

「何だ、これは」

「あんたに 50両懸っていたのさ」

いつの世も女房殿は、亭主より光物ひかりものが好きなようでございます。

お後がよろしいようで。

盗賊

皆様よくお出でくださいました。

ブログが大いにネット上で人気になりましたて久しいんですが、特に男性諸氏は女性のブログに集まるんですが、コメントなんぞ読んでますてーと、そりゃー涙ぐましいくらいに何とか注意をひきつけ様と褒めたり、おだてたりするんですがね。あたしもこんな仕事してるもんですから、駄じゃれやいろいろコメントして来たのでございまして、するってーと、こちらの職業に興味を示される事になりまして、あたしはこう返信するのでございますよ。

私の仕事は泥棒です、狙うは只ひとつ、ズバリ女性のハートってね。

その昔石川五右衛門が「浜の真砂まごいは尽きぬとも、世に盗人の数は尽きまじ」と嘯うそておりましたが

子の刻古びた御堂に4人組の背中に荷物を担いだ集団が入ってまいります、どうやら盗賊集団の様でございます。お堂にロウソクの灯りが点きますと、やわら円座になって座りますと頭目らしき男が口を切るのでございます。

「今日の出来は上々だ、さあ上がりをここに出しな」

円座の中心に風呂敷を広げた、金を数え始めた。

ひーふーみー
一二三・・・九十五

「オイてめえら、金をくすねた奴がいやがる、100両ある筈が5両たりねー誰でー、五郎三てめーか」

「いえ滅相も無い、あっしじゃございやせん」

「じゃー 半吉、てめーだな」

「お頭、あっしじゃござんせん」

「一体誰なんでー、この組に手癖わりの悪い奴はいねー筈だ」

「長兵衛、おめーか」

「とんでもございやせん」

「いいかよく聞け、嘘は泥棒の始まりっていうんだぜ」

お後がよろしいようで

寺社めぐり 改訂版

今日もよく起こし頂きありがとうございます。

今も昔も神社、仏閣巡りは人気で御座います、参拝の仕方でも神社と寺では違かしわでうございます。先ずは拍手を打つのは神社、二拝二拍手一拝が正統となっております。寺社になりますと合掌のみで、賽銭箱が置いてあるのは共通で御座います。

賽銭を入れずにニコリと微笑んでお参りする事を素参り（smile）と云うので御座いますよ。

長屋の隠居と魚河岸の八兵衛が縁側で話しをしています、

八兵衛は

「ご隠居明日から母あとチョイと高野山までお参りに行ってきやす」

「それは殊勝な心がけじゃないか、それと八さんや お寺の名には必ず山がつくね何故だかわかるかね」

「わらべ歌に山寺の和尚さんは、と、あるからでやんしょ」

「それは本末転倒ってもんだ、いいかい昔は修験者が山に籠もって修行し山にお寺を建てたからだよ、お前さんが行くお寺もほら 高野山金剛峰寺っていうだろ、比叡山延暦寺も山と寺が付くじゃないか」

「これは良いことを聞きやした、じゃーこの町内にもいくつかお寺がありやす」

「ホー、この町内にありましたかな」

「ホレ 角の病院なんぞいっぱいお寺ありやす」

「病院とお寺とは縁起でもないね」

「山さんと寺じでしょ

看護婦さん赤十じ

そこを歩いていく母親もお寺でさー

お母さん子が大事、

八兵衛ちもありますぜ

「そうそう、その像の下を男が風呂敷包みを持って出てこうって奴がいやしてね、するってーと像の眼が光やして、それから大変な事が起ったんでさあ」

「ほうほう其れで其れで面白いね、像はどうしたんだい」

「阿吽像はそれこそ雷のような声で

『待てーい』と響きやして、

男は『待てとはオイラの事か』

『そうじゃ お主しか居らぬわ、その風呂敷き包みを見せーい』

『いえ決して怪しい者ではござりませぬ』

風呂敷の結びは解けやして、中から仏具が出て来たんでんさ、その男逃げ出そうしやすと、像は足でその男を踏みつけやして、男は背中に足を置かれ、おもわず ブーとおならをしたんでさ」

「それで、どうなった」

「阿吽像は『お前クサイ奴』、泥棒は『仁王か』」

お後がよろしいようで

桶（前書き）

大工の八さん、お礼の桶のわけは

桶

ようこそお出で頂きました、梅雨も明けますてーと暑い日が続きますんで、体調にお気を付け下さいませね。

今年は節電と騒がれてますが、江戸時代は現代のようにエアコン御座いまして、あんなに暑く感じるので御座います。同じ音が無いのが江戸風鈴の特徴なんです、嘶を聞きながら風鈴の音を楽しんで頂ければ一服の涼となりますでしょうか。

いつもの様に大工の八さん、仕事が終わってお寺の境内を通ります、そこにポロポロの着物を着て座っている男が声を掛けます。

「これ、そこを通る棟梁しばし待たれよ」

「棟梁とはあつしの事でござんすか」

「そうじゃ、お主しかおらぬわ」

棟梁と呼ばれて八さん、気を良くしております。

「あつしに何か御用で」

「実はもう下駄の歯が折れて難儀しておるのじゃ、お主、大工なれば直して呉れぬか」

この男乞食の風体をしながら、武士の様な横柄な言葉であります、八さん人に頼むのに言い方ぐらい丁寧に言えんかと思ひながらも、道具の中から板切れを出して直します。

「これで宜しいんでござんしょう、どうぞお履きなすって」

「おお流石の腕前で御座るな、身共が見込んだだけの事はある、お礼をしたいが何も持ち合わせがござらぬ」

「なに、これ位良いつて事よ」

「いやそれでは拙者の気が済まぬ、それではこの桶を預けようぞ」
ポロ布に包まれた桶を出します、出てきた桶は春慶塗の鮮やかな朱色をしています

「これは見事な桶でございますな、此れしきの仕事で宜しんですか」
「武士に二言はない、いいから受取れ、但し35日の間お主に預けるだけである」

「じゃー お武家様遠慮のうお預かりします」

「お母ア、今帰^{けえ}ったぜ」

「おや、お前さんどうしたんだね、その桶」

「実はよう こういう訳でな」

「そうかい、これ何して使うんだろうね」

「取り敢えず、神さん棚でも置いとくか」

さて八さん、この桶を置いてから富籤に当たるは、仕事も沢山入ると運が向いてきます。

「お前さんこの桶、福の神だねいい事尽くめじゃないか」

「なんでも人には親切にしてくもんだ」

それから一ヶ月した頃、八さん夜中に声が聞こえます

『返せゝ 返せゝ』

「おいお母ア、天井から声聞こえねゝか」

「ムニヤ ムニヤ 何だよこんな夜中に」

二人は声の方を見ますと、あの桶から聴こえます、そつと畳の上以降ろすと声は止まります。

「何だ 気のせいかな」

その夜から毎晩『返せゝ 返せゝ』と聞こえます、それからと言うもの、八さん怪我はする、上さんは病に伏すと前の運が嘘のように無くなって参ります。

八さん大家さんへ相談に行きます

「ちよいと大家さん相談に乗ってください」

「おや八さんどうかしたんだね」

八さん事の仔細を言いますてーと

「そうかい、それでは知り合いの祈祷師に御祓い頼んで見ようかね」

早速、祈祷師と介添人が参りますと八さんの家で護摩木を焚きます。

「観自在菩薩 行深般若波羅蜜多時 照見五蘊皆空

度一切苦厄 舍利子 色不異空 空不異色 色即是空

空即是色 受想行識亦復如是 舍利子 是諸法空相

かんじざいぼさつ ぎょうじんはんによ はらみったじ しょう

けんごうんかいこう

どいっさいくやく しゃりし しきふいくう こうふいしき し

きそくぜくう

くうそくぜしき じゅそう ぎょうしきやくぶによぜ しゃりし

ぜしょほうくうそう」心経を上げますと、

「エエイ」

祈祷師突然、前のめりに成り一回転して八さん夫婦へ向きを変えます、低い声で唸るように

「ワシは大谷吉継なるぞ、この桶に首が入っておる。芝にワシの胴がある、返せゝ 返せゝ」

「おークワバラ くわばら」

八さん両手を合わせ疊に頭をこすり付けたので御座います、祈祷師は氣絶し、その後介添人が背中を膝に当て両肩を引きながら喝を入れます。八さん震えながら

「大家さん、その大谷吉継ってのは、どんなお方でござりましょうか」

「戦国武将でな、石田三成の盟友じゃ、あの関が原の戦いで三成にこの無謀な戦を制止したのじゃが、石田が頑として諫言を聞き入れなかったじゃ、負け戦と分かっていながら盟友である故、西軍として命を落としたのだな、あの家康公が唯一褒め称えた武将じゃな」

「それで、あつしはどうすりゃいいんで」

「徐霊は未だでござる、今夜そなたの夢枕に現れるであろう」

その夜は寝苦しい蒸し暑い日でございます、祈祷師の言ったとおり

夢に

『八ゝ 八ゝ 吉継なるぞ 明晩丑の刻 芝増上寺は境内に桶を持て』

八さん桶を風呂敷に包み、ぶつぶつ呟きながらお寺に参ります。

「何もこんな夜中にしなくても 日の高い内にしてくれりやいいのに、烏は鳴きやがるし人気ひとけは無えし」

増上寺の境内に着きますと生暖かい風と月に雲が掛かり真っ暗闇の中突然、呼び止められ暗闇に鎧姿の武将が立っております。

「八よく来た、八、ここじゃ、先日は下駄で世話になった」

八さん驚愕して、腰を抜かしてしまうので御座います、

「アーびっくりした、何だ先日のお武家さんか、あんたのお陰でエライ目にあつたぜ、」

「お主ワシの言葉忘れたか、35日預けると申したのう」

八さん、桶を受取って以来いい事尽くめでスツカリ忘れております今日は49日目、改めて男の顔を眺めますと頭がありません

「返せゝ 返せゝ 置いてけゝ」

「ゲッ お許しを」桶を差し出すと、八さん飛んで帰るので御座います。

「お母ア 帰けえったぜ」

「ギャー お、お前さん その姿は」

八さん首から上を置いてきてしまったので御座います。

「お母ア どうしたんでえー」

八、頭から被っていた半纏を脱ぐと

「お前さん無事かえゝ、てっきり首が無くなったかと」

「歸りに雨が降り出したから、被って来たのよ」

下駄の齒、お足が元で首を失う一席で御座いました。

かごめ かごめ (夏のホラー2011) (前書き)

旗本家臣、古池新三郎が妻の波は原因不明の頭痛に悩まされます、
治癒祈願に奈良、脳天大神に参拝するも寺で待っていたのは。

かごめ かごめ (夏のホラー2011)

今日もよくおいで頂きありがとうございます、奈良の吉野山は桜の名所でございます、その頂上には金峰山きんぷさん蔵王堂が建立されており世界遺産に指定されてから観光客も年中訪れるようになったのでございます。本堂の左側に脳天大神のうてんおおかみと頭の病にご利益りやくがある金峰山の塔頭（分院）として龍王院がございます、龍ですから蛇の化身が祀られております。ここは寺としては珍しく谷底に御座いまして階段を何百段も下りてまいります、訪れる方も階段を見ただけで尻込みしてしまうので御座います。

本殿から百度参りの廊下の抜けますと、現在は移転しましたが、10年ほど前まで人形供養と思われる社があり行って見ますと人形やら動物のぬいぐるみが山になっております。しかし何か近くに参りますとブルツと悪寒が走ります。

この社の案内を読みますと、水子供養の祠ほしらだったので御座います。これらの人形は独特の淋しげな表情をしてるので御座いますよ。人形と雖も幼くして主人を失い、増してや愛玩していた子供の悲しさが乗り移るので御座いましょうか、興味のある方は一度、この様な供養してある祠を訪れては如何でしょう。

よしんば霊が取り憑いても、そこは自己責任でございますよ。

ここは旗本家臣古池新三郎の屋敷のことで御座います、城勤より帰って参りますと奥方の波が床に伏しています。

「波、いかが致したのじゃ」

「殿様、夕刻より頭が割れるように痛いので御座います、お出迎え出来なく申し訳御座りませぬ」

「それは心配である、早速医者呼び申そう」

ほどなく医者が参りますが、首を傾げております。

「熱もござらぬ脈も正常原因が分かりませぬ、本日の処はこの煎じ

薬を飲ませて下され」

薬の効能があったのか痛みが止まります、しかしその翌日も夕方になると痛みが走ります。

「何、毎夕刻になると痛みが出るとな、これは何かの祟りかもしれない修験者に御祓いを願うてみようぞ」

山伏姿の修験者が参り護摩木を焚き人文字を描くように印を切りま
す。

「おん そらそばていえい そわか、エイ」

修験者は狐の様な目に変わり、新三郎夫婦にこの様に告げたでござ
います。

「我は役の行者なり、葉月15日吉野龍王院へ参られよ」

二人は吉野山を目指し旅立つも途中、川止めに遭ったりしまして蔵
王堂到着には15日夕刻となりました。

「波、戌の刻になってしまった、本日中であると二時しかござらん
下まで歩めようか」

「殿様、大丈夫でござります、それとお供え物に卵を用意せねば成
りませぬ」

堂の入り口に店の戸板が一枚開いております

「おお、ここで尋ねてみようぞ」新三郎は戸口を叩き

「御免、どなたが御座らぬか」

店の主人が出てまいります。

「お武家様 この様な時刻に何でござりましょう」

「龍王院に参ったが、卵を分けて貰えぬか」

「宜しゅうございます、院へのお供えは途中途中、参拝為されます
と三十六箇所はございます、その数でございましょうか」

「お主が申すとならばそれだけ頂こう」

「お殿様、あと一つお求めて下さりませ」

「波、この主人が三十六個と申しておる、それで良いではないか」
男と云う者は些細なことをケチるのでございますね。

本殿蔵王堂に参拝し左手の階段を降りますと、50坪程の平地があり浴衣姿の童女が三人「かごめ、かごめ」とわらべ歌で円くなって遊んでおります。

「その童女や、日が暮れて参るぞ早く帰られよ」

新三郎が帰りを促しますと一人が応えます

「お武家様あたい等は龍王院が家にてござります。若しかして、そのお姿は院へお参りでござしゃんすか」

「おお、そうじゃ良く分かり申したな」

「卵をお持ちゆえ分かります、あたいが道行お連れ通り致しまする、卵を一つくだしゃんせ」

「あたいにもくだしゃんせ」他の二人もせがむので御座います。

「それは心強きこと案内頼み申す、足元暗きなれば良い所でめぐり逢えたのう、波」

「殿様、これもご加護かと存知まする」

童女は懷に卵を入れつづら折りの階段をぬるりするりと、くねるように下りて行きます。

やがて半時が経ちますと、真っ暗闇に童女の浴衣は満月に照らされ青白く輝くので御座います。童女は像を示し、

「お武家様、この塚にお供えくだしゃんせ」

役の行者の塚を示します、次は一願不動、忠臣忠信の狐塚と400段余りを降りた時、36個の卵も1個を残すのみとなりあの童女達はいつの間にか消えてしまったのでございます。最後の下り階段は直線に50段ほどになり暗闇の中、月明かりを？りに本堂入口に到着します。

「殿様、あの童女はいずこに去ってしまったのでしょうか、姿が見えませぬ」

「そう申せば最後の階段あたりから居なくなってしまったのう、恐らく親の元に戻りたのであろう、波ここに手水があるこれで喉を潤そうぞ」

新三郎は龍の口より溢れ出る水を柄杓に注ぎ、波に渡したときで御

座います。

「殿様これは勿体ない、ありがたく頂きまする」

波が一口飲もうと柄杓の水を覗きますと

「おゝ殿様、こ、これをご覧下されませ」

波は思わず柄杓を落とし水はこぼれてしまいます。

「如何致したのじゃ何も無いではないか、ささもう一度」

新三郎は柄杓を拾いながら、もう一度水を汲み

「申し訳御座りませぬ、柄杓の底に蛇のような眼が赤く写りてございまする」

「星明かりでも水に写ったのであらう、さあ本堂へ参らうぞ」

小さな堀沿いを灯籠の明かり伝いに本堂へ最後の卵を供える新三郎でございます。そこにいつ来たのか童女が現れます、こちらへお出でとばかり百度参りの奥廊下に手招きしたので御座います。

「お武家様こちらで、ごゆるりして下しやんせ」

童女の人形が何体も並んでおります。

「波、これは桃の節句がごとき見事な人形でござる」

「本にお殿様、見事でござりまする」

「お武家様、あたい等と遊んでくだしやんせ」

「おお良いぞ、ここまで案内してくれたゆえ易き事、して何をしようぞ」

「かごめでお武家様方、籠の鳥になって下さりませ」

「そうか、では眼をつむるぞ」

新三郎と波は三人の童女に囲まれ、円の中に座ります。

「かゝごめ かごめ 籠の中の鳥は いついつで出やる

夜明けの晩に鶴と亀が滑った、後ろの正面だゝれ、後ろの正面だゝれ」

新三郎、波が振り向きますと、片脛は蜂に刺された様に腫らし手足には青痣、頬は焼け爛れ、口には血糊がついた女兒が立っております。

「母様、雪はお腹が空いておりまする卵を一つ下さりませ」

最後の卵は本堂に供えた為ありません、

「父様、雪を叩いて下さりますな」

新三郎は刀に手を掛けます、突然三人の童女は白蛇に変わり新三郎の手脚へ蔦の様に絡みついたので御座います。

今を去ること2年前、古池新三郎は人妻であった美貌の波に横恋慕し不義密通を重ねるを隠さんが為、前夫を冤罪に陥れ切腹させたので御座います。波の連れ子であった雪は新しい父親に馴染めず哀れにも新三郎の折檻により幼き命の火が消えてしまします、波も新三郎との間に子を設けるも流産してしまうので御座います。

親は一世、子は二世、孫は三世、間男は四世よせなんて言葉が御座います、江戸期姦通罪は死罪で御座います。

新三郎はおのれ妖怪と刀を振り回します、手に絡みついた蛇は肩を噛み、或いは足を締め付けられながらも雪に刃を振りかざします。
「殿様何をなさいます、よく言い聞かせまするゆえ雪をお許しく下さりませ」

波は雪を抱きしめ背を向けるや肩から袈裟に斬られてしまったのでございます。

返す刀を蛇が巻き付き新三郎の腹へと突き立てます。よろめきながら刀を抜き百度参りの廊下に吊られた灯籠の鎖を切り落として行きます。夜更けの寺にカラン、コロンと音が響きます、廊下を抜け石橋を夢遊病者が如く髻もも外れ髪を垂らした新三郎は欄干より大きな口を開けた龍が待つ谷底に落ちてしまうので御座いました。

雪は波の倒れた隣に座り、両手を握り

「母様、雪が付いておりまする」

「ああ雪、母を許しておくれ、この母を」

「雪は何があらうと、母様の子でございます、こうして胸に抱かれ、子守歌を聞かしてくだしゃりませ」

「そうか雪、昔のようにな　ねんねん　ころり・・・」

翌朝の事、修行僧が水子供養の祠の傍らに女性が骸になった女兒を抱いたまま息を引き取った姿を見るや、おお、これはと僧は心経をあげます。

「こんがらぎ矜羯羅童子 せいたか制吒迦童子 ふだう不動恵童子 こうもつしょう光網勝童子 むくろ無垢光童子
けいしにどうじ計子爾童子・・・・・ うばけい烏婆計童子」

三十六童子を読み挙げますと、女兒の抱いた淋しげな人形には微笑が浮かんで参ったのでございます。

名が雪だけに、子を思う母が冷えた雪の心を溶かす一席で御座いました。

(了)

かごめ かごめ (夏のホラー2011) (後書き)

脳天大神は受験シーズンともないますと、合格祈願の絵馬が溢れます。

蚊

毎度お越し頂きありがとうございます。

最近の蚊は血を吸うのが早くなりましたね、こうして書いている間にも目の前を通過したと思いきや、もう吸って逃げて行くので御座いますよ。

年頃の娘を持った夫婦が何やら話をしております。

「ねーお前さん、娘の小夜さよのことだけでさ器量さじょうはあたしに似て申し分ないんだけど蚊に刺されるとジンマシンのように酷くなるんだよ、あんたも染物職人なら蚊に刺されない着物を考えておくれじゃないか」

「何が器量はあたしに似てだと、お前めも昔は、立てばシャクヤク、座れば牡丹、歩く姿は百合の花なんて云われたもんだが、今じゃ立てばビヤ樽、座ればタライ、歩く姿はドラム缶になっちまいやがった」

「何言ってるんだよ、お前さんも地上の星のエンディングじゃないか」

「なんでえ、その地上の星のエンディングってのは」

「頭はヘッドライト、火の着きそうな屁かまして、テールライトだよ」

夫婦という者は一言多いんで御座います。

「小夜の着物ねー、虫除けには藍染めと決まってるい、だけど蚊取り線香もってデートなんて色気もそっけもないからなく、まかしておけて」

試行錯誤の末、蚊の寄り付かない着物が出来たので御座います。

「おう小夜この浴衣着てみな、もう蚊に喰われなくていいぜ」

「おとっつあん、ありがとう」

「流石あんた、また惚れちゃうね、これで安心して嫁に行けるよ」

小夜は両国の花火大会に出掛けて参ります、帰って来るや泣き出してしまったので御座います

「とっつあん、この浴衣着て行ったら誰も声かけて呉れないよ、幼馴染の仙吉さんさえ見向きもしない」

蚊に刺されない浴衣だけに、虫もつかない一席で御座いました。
お後がよろしいようで

片付け

本日もよくお越し頂きました、最近は物が溢れております。先日、久々に連休が御座いましたので、女房と部屋の片付けをしますと、出るわ出るは不要な衣類、小物それが殆ど女房の持ち物で御座いまして、あたしも言っちゃったんで御座います。

「一年使わない品は一生使わないよ、お前の衣装缶は同じ缶でも、柩の棺だな・・・これで陽の目に逢えない」

「また要る時に買わなければ成らないでしょ」
女性という人は、こんな調子で捨てれないので御座います。それが溜まり溜まり部屋の足場も踏む所も無いほど狭くなっていくのでございませぬ。

大工の八さん、ご隠居の母親が亡くなり片付けの応援を頼まれます。

「こんにちは、ご隠居あつしに何か御用で」

「おう八さん、よく来てくれたね、実は先日わたしの母親が亡くなったのは知っておいでだろ」

「へい、この度はご愁傷さまでござんした」

「それでだね、母親の部屋の片付けを頼まれておくれでないか」

「よござんす、ご隠居が指示しておくんない」

部屋に入りますと、それこそ足の踏み場ありません。

「ではこの箆笥から始めておくれ」

八さん引き出しを一段づつ床に降ろしていきます。

「ご隠居、流石お大尽でございますね」

出て参りますのは、下着500枚以上、長襦袢と和服100枚、防虫剤300個、足袋300足、手拭数知れず

「お隠居、御祖母さんこんなに買い込んでどうしたんでしょう」

「母親は物の無い時代に育ったからじゃろう」

「全部処分してよござんすか」

「構わないよ、箆筥に入れて置いてても何時か捨てるだけじゃな」

「勿体ないじゃござんせんか」

「八さん豊かさには二つあってな、物で豊かを感じるのを買った時だけ、部屋に入ったとき思わなかったかい。有りすぎて一杯になるとイライラするだろ。これは豊かじゃないんだな」

「ご隠居、それは有る人の贅沢で御座いますよ」

八さん汗を拭きふき何とか片付け終え、家に帰りますと

「かかあ 帰^{けえ}ったぜ、今日はご隠居宅で片付け物してな、部屋がすつきりするのには気持ちがいいってもんだ、明日は内を片付けようぜ。ご隠居が言っていたがな、物はある過ぎると豊かになれねーと」

「お前さん、それ以前に内には物がそもそも無いんだよ、あんたこそ片付けてしまいたいよ」

お後がよろしいようで

クリスマスプレゼント（前書き）

江戸小唄にこんなものあり？

クリスマスプレゼント

今日もお出で頂きありがとうございます。

先日幼稚園児が通りすがりに童謡の『お使いありさん』を歌いながら帰る姿に出くわしまして、子供はよございますね、明日へ希望が湧いて来ますね。

アリが頭を合わせるのは、餌の情報交換だそうでコミュニケーションを交わしてるので御座います。もし一匹が石頭ですと大変な事になるのでございます。

今日もありさんがゴツンコしています。

「イテテー ヤイ三太 お前^めえは何て石頭だ」

「ゴメン そつと当てただけだよ」

アリの三太は仲間の蟻とゴツンコしては相手のアリをどんどん気絶させてしまいます。

「お前なんか この餌運びやめてしまえ」

仲間から邪魔者扱いされ、トボトボ巣へ帰って来ました。

「おや三太どうしたんだい、餌運びしてるんじゃないのかい」

母アリが尋ねます、三太は半べそを掻きながら

「おっかー 何でこんな石頭に産んだんだよ わーん」

「そうかい 母ちゃん悪かったね 巣作りに回して貰おうかね」

ところが固い頭が巣を壊してしまいます、ここでも

「お前のような役立たず、他所^{よそ}へ行っちゃえ」

あの場所この場所と変わりますが、石頭が邪魔をしまい、とうとう巣での居場所が無くなってしまいます。

巣の外には兵隊アリの門番がいました。

「兵隊アリのおじさん隣に居ていい」

「おお三太どうしたんだ」

「僕、ヘマだから誰も相手にしてくれないんだ」

「そうか、お前の頭は固いから皆んな怪我するからな」

「僕大きくなったら、おじさんの様に強くなりたいんだ」

それから来る日も来る日も門に出て、兵隊アリと相撲を取っていました。働きアリは横目に見ながら

「三太は何だよ、遊んでばかりいて少しは仲間の手伝い出来ないものかね」

これ聞こえよがしに三太の横を通り過ぎて行きます。

そんな或る日の事、見張りのアリが慌てて巣の方に走って参ります。

「大変だ、大変だ大アリの軍団がこちらに来るぞー」

大アリ軍団は巣を狙って卵を一つ残らず掠^{さら}う集団です、体も三太の仲間の倍もあるのでございます。

巣の周囲に警報のラッパが鳴り響きます。

「急げ急げ巣に戻れ」

アリ達は列を成し巣へ雪崩れ込んで参ります。門の前では兵隊アリが必死に押し寄せる大アリと戦っていますが、如何せん体格の差は抗しがたく、瞬く間に倒されてしまいます。その様子を扉の隙間から三太見ながら門番の兵隊アリの前に大アリが向かって来ました。

「おじさん危ない」

三太は思わず門へ駆けて行きます。

「三太、子供は引っ込んでいろ」

門番のアリが向かって行きますが、大アリの一撃で飛ばされてしまいました。

「よくもやったな こうしてやる」

三太は大アリの腹部へ頭突きをしたのでございます、何と大アリはその場にへなへたと倒れてしまいました。

三太は向かってくる軍団をあれよあれよと倒して行きます、三太は勢いに乗り

「1匹2匹は面倒だ、3匹4匹は多すぎる、サー東に成って掛かってこい」

頭目らしき大アリが来ました

「てめーら 何てこんな小僧に梃子摺ていすってんだ」

頭目は三太の頭をガブツと噛み付きました。

するとどうでしょう、歯が折れてしまいました。

「イテテゝ 何て野郎だ、者共ここは引き上げだゝ」

「お前ら甘い物のの喰いすぎだ、ここには二度と来るな」

三太は門番のアリの側に寄って

「おじさん大丈夫、大アリは居なくなつたよ」

「三太見直したぜ」

巢から仲間がやって来ますと、三太を胴上げし女王アリの下担もとがれながら運ばれました。

「三太よお前にクリスマスプレゼントを授けよう」

女王は三太の頭をペロリと舐めました

すると、三太の頭は他のアリと同じ柔らかさになりました。

「女王様これは一体どうしたんでしょう」

「三太、今まで苦労したであろう」

サンタクロース・・・お後がよろしい様で

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5455r/>

江戸小噺 集

2011年12月17日23時52分発行